

いじろのとも

第八卷

四月号

無条件の受容

障害児は
障害をもっている
だから
その障害を
少しでも克服したら
社会に
受け容れられる
発達を
保証してやれば
存在できる

人に好かれる
障害児になれば
人に負担を掛けない
障害児になれば
存在が許される
だが
人間の存在は
無条件に
尊重されるべきもの

よい人とは

よい人とは
自分の中の
自分ではなく
自分の中の
他人を愛する
人のこと

人生を考え直して

みたい人は(四〇)

『聖書』解説(一六)

マタイ福音書第五章を続けます。

四三 『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。
四四 しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。
四五 それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。天の父は、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも正しくない人にも雨を降らせてくださるからです。
四六 自分を愛してくれる者を愛したからといって、何の報いが受けられるでしょう。取税人でも、同じことをしているではありませんか。
四七 また、自分の兄弟にだけあいさつしたからといって、どれだけまさったことをしたのでしょうか。異邦人でも同じことをするではありませんか。
四八 だから、あなたがたは、天の父が完全なように

完全でありなさい。

出だしの「自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め」は、これまでの通り、従来からのユダヤ教の律法を述べたものと考えられます。前半の「自分の隣人を愛せ」は、その通り旧約聖書に説かれていますが、後半の「自分の敵を憎め」は、旧約聖書に直接に対応する文言はありません。ただ、旧約聖書の精神をくんでこう言われたものです。戦争のことを考えれば、一般社会の倫理としても理解できると思います。

これに対し、キリストは言われます。敵を憎むのではなく、その敵をも愛せよ、自分を迫害する者のためにも祈れ、と。

こんな常識はずれなことが、どうしてできるのでしょうか。現実に、今、キリスト教者が同じキリスト教者でも宗派が違うというだけで、隣人とさえ思える相手を憎み、暴力的なテロ・殺人行為さえも行っています。

なのに、キリストは敵を愛せよと言われるのです。二千年たった今でさえ、キリスト教者ができていないことを、どうしてできると言うのでしょうか。

その論理的根拠は、天におられる父なる神は、区別なく、悪い人にも良い人にも太陽を上らせ、正しい人にも

正しくない人にも雨を降らせて下さるからなのです。つまり、私たちも、みな神の子だとすれば、神と同様に、悪い人も良い人も、正しい人も正しくない人も、区別なく、愛さなければならぬというわけなのです。いや、そうできてこそ、「天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。」

誰でもが知っていますように、この大地には、太陽が上り、沈み、雨が降り、あがり、万物が成長し、枯れて、自然の営みが不断に為されています。

この自然の営みに、善悪も正邪もありません。大風が吹くのも、地震が起こるのも、大雨がふり洪水が起こったり、大地が崩れ落ちたりするのも、善悪や正邪には無関係なのです。それを、災害と思うのは人間のエゴイスティックな判断によります。実は、人間も自然にはどこまでも随順するだけなのです。文明が高度になればなるほど自然の猛威の前では、災害が大きくなってきますが。

この自然の営みのように、私たちは、誰に対しても愛を捧げなければならない、というわけです。愛してくれから愛するものではありません。愛してくれなくても、逆に、無視されても、悪口を言われても、憎まれても、迫害されても、愛を与えるのです。

これは、まさしく現代人がしていることと逆のことで

す。現代人は自分は、人を信じず、無視し、悪口を言い、憎み、迫害していても、自分はその相手からさえ愛をもりたいのです。私の接している大学人の多くも、その例外ではありません。もし、社会の皆がそうになったら、この世はどうなるのでしょうか。

実は、個人主義が進むとそうやって行くのです。現代はキリストの生きておられた時代に比べ、はるかに個人主義化しています。人が人を信じることができなくなっています。それは、絶対者を信じることができなくなっているということと同じです。知識を多く持つて、さかしくなった現代人にとって、自分自身や自分自身の考えが（好みや損得が）いちばん確かで、信頼できるものなのです。知識や名利などで人生が分かる訳がないのに、それが分かりません。自分の無知を知らないのです。

ですから、キリストの教えに従う者が、同じ教徒を迫害し、殺害しているのです。まさしく現在のキリスト教も末法の時代といわなければなりません。

では、キリストが説き、それを信じているはずの、キリスト教者が二千年かかって、その教えを実現できないのは、どうしてなのでしょう。

先ほどの言葉で言いますと、実は、神の子になったとき、はじめて、敵を愛することができるのです。

しかし、そうなれる人は滅多にいないわけですから、法として説くときは、「敵を愛せよ、それでこそ、天におられるあなたがたの父の子どもになれるのです。」となるのです。

ですから、この教えを信じて、どこまでも守るとき、神の子となつた人と同じように、人生で過ちを犯さず、悪をなさないで、生きていくことができるのです。それは、その人にとって幸せな人生であるだけではなく、周囲の人もそれによって幸せにできる人生なのです。

でも、現代人は、信じ、それを守ることができません。ですから、自分や自分の考え方に固執して行動しようとしません。それが正しいことだと思つているのです。二千年かかって、キリストの教えを実現できないのは、人々の信じる力がだんだん弱まってきているからです。キリストの教えを、どこまでも信じて守ろうとする人が多ければ、自然に争いなぞなくなってしまうはずなのです。でも、そうはなつていません。では、これを抜ける道はどこにあるのでしょうか。

その答えが、最後の「だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。」なのです。

でも、この教えが分かるキリスト者に、私は不幸にして、出会っていません。

これは、弘法大師・空海で言えば、即身成仏ということなのです。キリスト者が、この教えを実行し、神の境地に達しようとしていないから、信じる力は民衆の中にだんだん弱まってくるのです。

神の境地などに達することは、キリスト以外の人間にはできつこないのです、私の知る限り全てのキリスト者が、そうするのではなく、この文言の解釈にばかり精を出しています。そして、自分の勝手のよいように理屈をつけて、間違つて納得しているのです。

老子は次のように言っています。「大道が廃れて、仁義がある（第十八章）」「道を失つて而る後に徳あり、徳を失つて而る後に仁あり、仁を失つて而る後に義あり、義を失つて而る後に礼あり（第三十八章）」と。

老子で言えば、現代は、最後の礼のみが存在するような社会になっています。この礼は、心理学用語で言えば、ソーシャル・スキル（社会的技能）と呼ばれるものです。日本語にも「慇懃（いんぎん）無礼」ということがありますが、そういう形容がつくような礼が、現在の日本では、多くの心の伴わない人によって行われています。私の勤める大学にも、こういう人が目立ちます。

この老子の言葉は、とても深い真理を含んでいます。こうした老子の文章に接しますと、老子の偉大さに心を

打たれます。まさしくこの通りなのです。すこし、解説しておきます。

礼の行われる前は義ですが、これは、私の作った「双対理論」で言いますと、「たましい」と「あたま」で作りだす建前なのです。ただの理屈なのです。でも、主義として理屈通りに守ろうとすることは、単に、その場限りの礼よりもよいと言えます。キリスト教で言えば、この義は、律法ということになります。

次に、義の行われる前は、仁ですが、これは「たましい」と「ところ」で作りだす価値で、それは自分を抑え（統制し）、他者を立てる（尊重する）ことです。

キリスト教で言えば、これは愛です。自分を抑え、自分をすてて、他者を愛することを、ここで取り上げてきた山上の垂訓で、キリストは、ずっと説いています。

また、孔子もこの仁を自分の教えの中心に据えました。

次に、仁の行われる前は、徳ですが、これは、「たましい」がその働きを發揮し、自己と他己が意識水準でバランスをとろうとしている状態です。礼も義も仁も、意識してバランスさせようとしている状態です。

キリスト教でいえば、パウロはこの水準にあったのではないかと思われれます。でも、この段階ですと、精神には神が宿っているのに、肉体には悪魔が宿っているとい

うことになってしまいます。そうならないためには、次の段階がいます。

それが、「父のように完全である」ということなのです。老子で言えば、道を体得して、無為自然あるいは無為無不為という境地にいることです。仏教で言えば、解脱あるいは悟りの境地にあるということです。お大師さんで言いますと、即身成仏している境地です。私の双対理論で言いますと、無意識にある「生命蔵識（煩惱蔵識）」と「自然蔵識（如来蔵識）」との統合がとれている状態です。

でも、これは、無意識でのことです。意識してできることではありません。ひたすら修行して、はじめてできることなのです。キリスト教で言いますと、一人静かにお祈りすることです。

こうなったとき、神の愛・仏の慈悲に満たされ、わざとしくなくても、自然にしている、誰でも好き嫌いなく、敵ですら、愛することができるのです。誰にでも、分け隔てなく挨拶できるのです。初対面の人でも、もう何十年もの知己のように、胸襟を開いて話すことができるのです。そして、もし他者が悲しみをもっていれば、その悲しみを吸収し、自分の発する喜びで他者を満たすことができるのです。それが、真の愛なのです。

自作詩短歌等選

あいづちの打ち方

人との会話で
自分が
しゃべるときではなく
相手の話を
聞くとき
そのあいづちの
打ちかたに
人柄が
表れる

真実は心の中

真実は
こころの中の
奥底に
ありて外には
なきものを
多くの人は
真実を
外に求めて
迷い深める

有為と無為の教え

孔子は
有為の教え
それは
徳目の教え
老子は
無為の教え
それは
解脱の教え
無為而無不為
（為すこと無くして
為さざること無し）
無為自然
（為すこと無くして
自ら然る）
の境地に至れ
そのとき徳は
自ずから現る

富んすりゃ鈍する

むかしは
貧（ひん）すりゃ
鈍（どん）する
いまは
富（と）んすりゃ
鈍（どん）する

慈気と邪気

人それぞれに
立ちのぼる
慈気
と
邪気
なんとか
慈気だけ
出したいものよ

愛を教える者

精神が
物と化したる
今の世に
愛の尊さ
教えるは
重きハンデを
身に負いて
この世に生まれし
障害児たち

修道士の殺人

修道士
修道院で
人殺し
修道士とて
人間と
仲間のコメント
寒々とする

子どもを犠牲

教育で
何かの主義を
唱えては
自分の名利
追求し
子どもの福祉
おろそかにする

自作随筆選

愛のゆくえ

先月号の本誌に、「障害者の平等と愛」と題する随筆を載せました。それは、スウエーデンでは障害者施設の解体がすすみ、障害者も社会一般の中で暮らすようになって来ているという、新聞の紹介記事を題材に、障害者の平等とはどういうことを考えたものでした。

真の平等が実現されるためには、愛が必要不可欠で、もしそれを欠けば、社会は崩壊していく、しかし、その愛は、平等を保障する人権の主張のような建前ではダメで、「こころを磨く」ことではしか実現できないことを、その結論として述べました。

こんなことを書いたことで、スウエーデンでは、その愛はどうなっているのか、関心をもっていました。

先日、蔵書をパソコンのデータベースへ入力していて竹崎孜という、スウエーデンのストックホルム大学大学院を卒業し、スウエーデンに長く住んでいる人の書いた『スウエーデンの実験』（講談社現代新書）という、手持ちの本が目にとまりました。早速、読んでみました。

十五年ほど前に出た本ですが、果せるかな、スウェーデンでは、人々は互いに孤立し、孤独を深めて、退屈や寂しさをかこち、若者はアルコール依存症や麻薬中毒にはしっていると書いてありました。

孤立を示すデータですが、例えば、単身で暮らす人が、総国民人口八百三十五万人中、男性では百三十万人、女性では百五十万人だそうです。これは国民の三人に一人は、一人暮らしだと言えます。この数値は一九七五年の統計のようで、現在はもっと進んでいるかも知れません。また、子どもは必ず誰かと一緒ですので、複数の子どもと一人の大人が暮らしているはずですから、大人だけだと単身者の割合はもっと増えるものと考えられます。

繰り返しになりますが、人間は自由であればあるほど、そして平等であればあるほど、一人ひとり孤立して行きます。先のデータが示していますように、人間にとつて最も基本的な集団である家庭すらが崩壊して行くのです。そうなりますと、精神衛生の基礎となる人と人との情緒的接触は希薄になり、他者とところを通わせることが困難になります。それは、まるごと人間として、本音で触れ合う場がなくなっていくということです。

しかし、人は、他者（最終的には絶対他者）、つまり社会に定位していて、はじめて、安心することができま

すし、生き甲斐を感じることもできます。そのことを私は、自閉症児から教えられました。そして、真言密教の修法（しゅほう）で実感しました。

つまり、人間は自己に閉じこもるほど、不安定になって来ますし、逆に、他者（特に絶対他者）にこころを開いているほど、安定しておれるのです。

しかし、悲しいかな、自己の自由を主張し、自己の適応に万全を期すほど、傲慢になり、自己が肥大・絶対化し、他者と心を通わすことができなくなつてきます。私のことばで言いますと、「人の心を感じるこころ」が麻痺して行くということです。

でも、他者を、人間として同等である、と認めることを否定することはできません。そうすることは、まさしく弱肉強食の世界の出現を肯定することにつながるからです。それでよいとする人はさすがにいません。となりますと、他者にも自分と同様に自由を、人間らしい生活を、認めなければならぬのです。それが建前としての人権であり、平等であるということです。

前述の、人間に安定をもたらす、他者への定位とは、他者（絶対他者）を信じるということです。他者に愛を捧げることです。我慢し、耐えることです。それなくして、自由と平等を真に実現することはできません。

釈尊のごとば（五六）

法句経解説

第一章 楽しみ

（一九七） 怨みをいだいている人々のあいだにあつて怨むこと無く、われらは大いに楽しく生きよう。怨みをもっている人々のあいだにあつて怨むこと無く、われらは暮らしていこう。

キリストは、マタイ福音書の第五章四三節で、「自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい」と言われています。

釈尊のこの偈も同様なことを言われています。主語が、「われら」となっていますので、僧団のことを言われているのだと思いますが、釈尊の当時にも、釈尊の僧団に怨みをいだく人がいました。例えば、それは、デーバダッタです。デーバダッタにつきましては、中勸助著の「提婆達多（岩波文庫）」に小説として取り上げられています。この人は釈尊のいとこだったと思いますが、釈尊の暗殺さえ企てたとされている人です。ご関心のある方は、ご一読下さい。

どんなに周囲から怨まれても、たとえ「下衆（げす）の逆恨み」で怨まれても、大いに楽しく生きよう、怨むこと無く暮らそう、ということですが、なかなか難しいことです。

怨みを感じますと、どうしてもそれに怨みで返してしまいます。怨まれていると思うと、こちらの心が痛むからです。でも、自分が何も悪いことをしていなければ、怨む方が逆に悪いことをしているわけです。ですから、こちらが悩まなくてもよいのです。哀れな人と思つて、ニコニコと優しくしてあげればいいのです。それでも、無視したり、悪口をいったり、迫害したりしていれば、法に逆らつて悪業を為しているわけですから、自然にその人はその業が熟して不幸になつて行きます。天罰が当たります。大学をはじめ、私の回りにもそうした人が結構、目につきます。

どうか、皆さんも怨みに怨みでもつて返すようなことは、止めて頂きたいと思えます。たとえ、下衆の逆恨みを受けたとしてもです。また、どんな人にたいしてもです。親でも、子でも、兄弟でも、近所の人でも、職場の人でもです。

あらゆる人がこれをしなくなれば、すぐに世界は平和になること、疑いなしです。

(一九八) 悩める人々のあいだにあって、悩み無く、大いに楽しく生きよう。悩める人々のあいだにあって、悩み無く暮らそう。

人間に悩みはつきものです。悩みのない生活は考えられません。ですから、その悩みはさまざまです。あらゆるものが悩みの対象になります。

お金は、無ければ悩みますが、できればできたで、悩みます。ある人は、小金をためたばかりに、それを死んだ後も、名前と共に残したいと、いろいろあがきます。普通に、子どもに譲ればよいのですが、そうすれば「親辛抱、子楽、孫へいとう(乞食)」になって自分の作った財産がなくなってしまう。そうならないように、いろいろ悩み、あがくわけです。

また、名誉を得、高い社会的地位につけばついたで、それに伴って悩みが生まれます。例えば、ある村長は、県や国の政策に反対する住民との板挟みになり、行方をくましましたが、その実は、病気になっていました。また、ある国会議員は、色々悩んだあげく、自殺してしまいました。私は、大学の教員が偉いとは、いまは、少しも思いませんが、自分では偉いと思っている人が結構

います。でも、悩みは尽きないようで、そのために病気になる人もいます。ですから、決して幸せだと言えませんが、

勿論、お金をためていなくても、名誉を得ていなくても、悩みは尽きません。親が思いどおりの親ではない。自分が、思いどおりの自分ではない。病気になってしまつて、治らない。子どもが、思いどおりの子ではないし、いうことも聞かない。連れ合いが、自分を分かってくれないし、勝手なことばかりして、家庭をかえりみない。つい浪費して借金をしてしまい、それが返せない。命を縮めると分かっている。つい不摂生をしてしまう。でもそのことが気になる。職場で思うように仕事ができないし、出世がままならない。自分が疎んじられている。生き甲斐が見いだせない。自分に怨みを持つ人がいて、ストレスを受ける。などなど、あげていけばきりがありません。

普通の人は、相対なみに依存しています。しかし、相対なものに依存している限り、悩みは尽きません。相対なものとは、自分の命であり、家族であり、財産であり、名誉であり、他人であり、世間一般などです。相対なものではなく、絶対な法を灯明とし、自分自身を灯明として生きて行きたいと思えます。そのとき、偈にあります

ように、悩みなく暮らしていくことができるのです。

(一九九) 貪っている人々のあいだにあつて、悪い(わずらい)なく、大いに楽しく生きよう。貪っている人々のあいだにあつて、貪らないで暮らそう。

ここで見慣れないのは、「悪い」です。でも、これは、普通使う「煩い」と同じ意味です。つまり、いろいろ思い悩むことです。

仏教には、頭陀行(ずだぎょう)というのがあります。これは、貪らず、質素に徹して、仏道の修行に励むことをいいますが、とくに、乞食托鉢をして歩くことをいうことがあります。そのとき、お布施を入れて頂く袋を首から下げて歩きますが、その袋を頭陀袋と呼んでいます。私も、托鉢したときこれを下げて歩きました。余談ですが、今も忘れられないのは、講演にいつでもお布施を頂くことはありませんし、滅多に「こころのとも」の講読申込みを頂くことがないのですが、托鉢していますと、必ず申込みが後できました。また、多額のお布施を下さった方もあり、大学や講演よりも、托鉢させて頂いている方が、ずっと法を説いているのだという思いがしていました。

私も、質素儉約を暮らしの一つの目標にしていますが、欲望を全て無くすることはできません。真言密教以外の顕教では、四弘誓願の中に煩惱無尽誓願断というのがあります。煩惱は無尽なので誓って断じていこうと願うわけです。でも、密教にはこれはありません。これに当たると考えられるものに、福智無辺誓願集があります。この福は財産で、智は智慧です。財産も智慧も尽きないので、誓って集めていこうと願うわけです。ここに密教と顕教の基本的な考え方の違いの一つが表れています。

欲を全く無くすることはできませんが、でも、財産を集めても、それに執らわれてはなりません。執らわれないうことは、それによって生き甲斐が決まらないということなのです。食べるものがどうしても手に入らなければ、飢え死にすることもよしとするということなのです。

でも普通は、それができません。集めれば必ず、それに執らわれてしまいます。また、集めなくても、欲望に執らわれます。

自分のために、誰かと会ったり、こころを通わせたりしなくてもよい。自分の慰めになること(余技・趣味)をしなくてもよい。自分のために贅沢なものが欲しいと思わないでおられる。そうなったとき、偈にあるように、真の質素儉約ができるのです。

後記

一、桜の花が、方々で満開になっています。枯れ木だったような樹にバツト咲くあでやかさと、まもなく散って行く、あの哀愁に満ちたさまは、多くの詩人や歌人の題材になりました。

二、四月八日はお釈迦さまの誕生日で、花祭りです。昔は、方々の寺で誕生仏に甘茶をかけてお祝いしました。

三、随筆選にも書きましたが、いま、パソコンにデータベースを作り、毎日、蔵書を入力しています。アスキーという会社の作った「ザ・カード」というソフトを使っています。使いこなすにはかなりの勉強がいりますが、驚くほど便利です。様式は図書カードですが、ふりがなを付ければ、著者名の「あいいうえお順」に並べ替えるのは、殆ど瞬時にできます。検索も自由自在にできるようになっています。例えば、明治時代に出た本で、教育関係のものだけをリストにすることも、いとも簡単です。また、例えば、心理学と書名についた本を捜し出すこともできますし、そのうちで、特定の著者のものだけに限定することも簡単です。また、各カードにはメモを付けることもできます。それには画像データもスキャナからとりこめます。ですから、まだしていませんが、各カードにその本の目次を付けておくこともできます。

四、でも、入力するのに、学生アルバイトで本を一旦リストに書くだけで、合計二百時間ぐらいかかりました。また、それをパソコンに打ち込むのに、いま、毎日かかっています。スキャナで目次を入力するまでできるかどうか分かりません。また、本を完全に利用するためには、キーワードも必要ですが、それも適切に付けるには、かなりの労力や努力がいります。

五、先日、畑で作った大根をもって、ある養護施設を訪れました。今は、昔に比べ入所者が減ってきたとのことでした。また、最終的に家庭復帰できることを原則にするようになったとのことです。

月刊 こころのとも 第八卷 四月号 (通巻 八十八号)	平成九年四月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>よしよし</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

